

# あそびーばー活動報告

塚本 岳（てんぱくプレーパーク）

## 活動期間

4月29日～5月8日（11日間）

7月11日～17日（7日間）

8月2日～13日（12日間）

10月16、17日（2日間）

12月28日～1月6日（10日間）

## 4月

当初は状況がわからない事もあり、車に大量の支援物資をつんで行ったが、ここの遊び場が、支援の場でなく子どもたちの居場所になるべきだとの考えから支援物資は配らず（おやつに材料程度は使った。）自由に過ごす場、避難所の子、家がある子等関係なく過ごせる、中立の場にしていった。

子どもたちの遊びに求めるパワーはとて大きく、今までの2カ月を取り戻すかのように遊んでいた。特に工作や料理作りがとて人気で、背景には3月依頼食事も配給等に頼らざるをえず、自分たちで作る事がなかった事が関係しているのではと思われた。

「この遊び場できるまでどんだけ暇だったかわかるか？」と話す子、「ここができてから子どもたちが本来の悪ガキに戻ってきた。」と言ってくれる地元の方、「ここで子どもたちが笑顔で過ごしてるのを見るのが今の私たちの元気の素」と話してくれるおばあちゃん等、地元の人たちにも思った以上に遊び場が受け入れられていた。

絵の具遊び、水遊び→遊び場だけでなく家にも水がない。

慣れない工作での小さな怪我→その子の置かれている状況（避難所等）であまり推奨できない

など通常の遊び場ではみられない問題もでてきたがその都度スタッフで考え対処した。（井戸水整備、いつもの現場より少し丁寧に工作レクチャーする等）

現場の整備、使い勝手がいいよう改装しつつの日々だったが、SVAとも共同でイベントも行い、子どもたち主体でのコンサートも行えた。

## 「お前いつ帰るんだ？ どうせすぐ帰るんだろ？」

初日に子どもに言われた言葉。一過性の支援が多い中（それはそれで必要だが）、大人はともかく子どもたちは、やってきては帰っていく人たちに複雑な想いを感じているようだった。特に遊び場は人対人の場なので、しばらくはなるべく同じメンバーが参加した方がいいように感じた。僕は正直今回のみの参加のつもりだったが、名古屋に帰ってからもこの言葉がひっかかり、現場を調整しつつ（けっこう無理やりに）何度か足を運ぶことになる。

## 7月

水が出るようになっている、仮設住宅が出来つつある等少しづつ状況は変わっていった。

水があっても学校のプールは使えない。地主さんが遊び場まで水をひいてくれたので、さっそくコンパネプールをつくる。地面が土なのですぐに水もドロドロになってしまうが、子どもたちは連日コンパネプールで水遊びし

ていた。他の現場ではあまりプールに入らないであろう、高学年女子たちがドロドロになり水遊びしてるのを頼もしく思う反面、選択肢が他にないためだとも思い複雑な気持ちにもなった。

4月にも地震、津波ごっこ等行われていたが、プールの撤収の時水を流す時に津波ごっこが行われる事が多かった。プールができた所為もあるが、こどもたちの中で津波や地震の恐怖を受け入れる準備が出来てきたのではと感じた。ただ、それを見て怖がる子どももちろんいて、やりたい子と見たくない子のすみ分けはスタッフがさりげなく別の遊びに誘う事で対処した。

## 8月

夏休みになり、遊び場も連日賑わう。小学校での学習支援（まなびーばー）、隣の小学校でのプール等子どもたちの生活にも少しずつ選択肢が増えていった。

工作、火遊び、ターザンロープ、毎日遊んでいる為にだんだんとダイナミックになっていく。あやうさは感じられず自分たちの場所、自分たちの遊びになっている。そして気持ちの方はだんだんと穏やかになっていっているように感じた。ボランティアたちに対するあたりも柔らかくなり、4月のような「どうせすぐ〜」みたいな感じはなくなっていった。（他現場と同じく、初めてきた大人に水かけて試すようなことはもちろんある。）

### 「また明日〜！絶対死ぬなよ！！」

ある日の夕方男の子が言った言葉。

最初意味がわからなかったが、震災で「今日のような1日が明日も訪れるとは限らない」という事を実感したから出た言葉ではないかと思う。この感覚自体は遊びで癒していくものでもないし、今後の人生においてはむしろプラスになるとも思う。

しかし、今の日本の名古屋や東京の子どもたち（大人も）には絶対に芽生えない感情でもある。東北の子どもが震災により感覚的にこういう感情を持った事を事実として受け止めたい。

## 10月

2日入っただけだったが、子どもたちは本当に落ち着いてきていた。

「遊びが子どもを癒す」という事を実感した。

田舎の子だから自然で遊んでいる、集団で遊んでいるという事はなく、都会と状況は同じ。この遊び場が出来るまでは大谷の子どもたちも外で遊んでいなかった様子。4月の子どもたちは震災の影響もあるが、慣れない他者とのコミュニケーション等もあつての荒れ方だったと感じた。それがこの遊び場でいろいろ揉めながらも遊び続けることにより少しずつ自分以外の他人を受け入れ、また自分自身の本当にしたい事をやる事で自己肯定につながっていているように思う。

神林のサポートに入ったので、冬支度の為の小屋作り、荷物整理等を行ったが、4時過ぎると暗くなり、遊び場は灯りをつけたとしても、都会とは違う帰り道の暗さなので、冬季は5時まで開園は難しいと感じた。

## 年末年始

冬季に入り、日が暮れるのが早まり平日はほとんど遊べない状況だという事で、冬休み中は連続開園したいとの意向を聞いての参加だった。

旅行に行ったり、遠くの親戚の家に行ったりしている子もいて全体的には少なめの人数だったが、毎日来る子もいてまだまだこの場所を必要としている子もたくさんいるんだなと感じた。

小屋の中にはコタツ、毛布等も置いてあり外で遊んだ後コタツでカードゲームする姿も見られた。「家だとみんな

なで集まれん。(仮設だし)」という状況の中、あそびーばーが子どもたちの共通の居場所になっているようだ。

以前にもあったが、地元の人たちが連日野菜やお餅を差し入れしてくれる。コタツや畳も寒いだろうからと持ってきて頂く。地域に受け入れられたんだと実感。また、かんぺーが風邪でしばらく休んだが、毎日のように「かんぺーちゃんh?」「かんぺーちゃん治ったか?」と聞きに来てくれる大人もいてあそびーばー同様にかんぺーも地域の人に愛されている事がわかった。

大みそか、お正月は地元の人たちに教えてもらい、お正月の飾りや地元のお雑煮なども作る。書き初めや初詣もあそびーばーで行えた。お返しに東京風や名古屋風のお雑煮も作り、「こんな形でいろんな地域のお雑煮が食べられるとは思わなかったよ。」との声も聞かれた。

最終日に地域のお母さんが新年会をやろうとお家に招待してくれ、2家族と僕たちリーダー4人で飲み会を行った。

「俺らの子どもの頃と自然はあまり変わっていないのに、外で遊ぶ子がいなくなっていた。あそびーばーが出来てそれに気づいた。」「いつまでも東京に頼ってはいられない(今すぐには無理だとしても)、この遊び場を自分たち地元の大人が作っていかねければ。」と話してくれ、被災者と支援者という関係から共に遊び場を作る仲間という関係に一步進んだように感じた。

かんぺーを中心に少しずつ地域と共に歩んでいる「あそびーばー」。僕が現地でできる事はもうそんなにないが、出会った多くの人たちの「自分の地元に戻ったら気仙沼の様子をなんでもいいから多くの人たちに伝えてほしい」との想いを受けとめ、たくさんの人に発信していきたい。

あそびーばーに関わり、これからの各地域に必要なと感じたこと

## 1、地域コミュニティの再生

避難所生活、仮設での生活等、地域のつながりがかろうじて残っていた東北だから混乱も少なかつただけで、顔の見えない関係の都会で今回のような震災が起きたら、もっと混乱するだろう。

一つの方法として「プレーパーク」のような子どもを中心にしつつ地域を巻き込んでいるような遊び場、居場所が(擬似的だとしても)ある事が有事の際に何らかの形で役に立つと思われる。

## 2、子どもにとっての遊び場の重要性

今回の震災では「子どもたちの抱える心の闇」という言葉がある程度クローズアップされた。しかし震災を受けていない地域の子どもたちにも、各自が心に抱える闇(?)はある。もちろん津波や地震ほどではないかもしれないが、親、友人との関係等、誰にだって大なり小なりあるだろう。今回気仙沼の子どもたちが遊び場を通じて自分を取り戻し、自分で自分を癒していくのを見て、やはり各地域にプレーパークのような場所が極端な話、各学区に1つくらい必要だと再確認した。

1、2共に以前から感じていた事であるが、今回の事で強く再確認できた。また、この震災を利用する訳ではないが、一般の方たちがこれらの事に関心を持ってくれやすくなったのも事実。少しずつではあるが多くの人に気仙沼の状況と共に伝えていくことがこれからの仕事だと感じる。